

幼児における特性推論の発達過程

—特性概念の基本的理解の獲得—

清水 由紀

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

問題

我々は、他人の行動から特性を推論し、また特性から行動を予測するということを、日常的に行っている。このような特性推論を行うためには、特性概念の基本的特徴である因果性（特性は行動の原因となるものと関連する）と安定性（特性は時間や場面を超えて安定している）の理解が必要とされる(Yuill, 1993)。本研究では、何歳からこれらの基本的特徴の理解が獲得されるのかを検討する。そのため、3~6 歳児を対象に、行動の結果ではなく動機の情報を用いて特性をラベリングし、また他場面における行動を予測することができるかどうかを調べる。さらに、認知的負荷の軽減がその過程に及ぼす影響について検討する。

方法

【デザイン】年齢(4;3・4・5・6 歳児)×動機(2;ポジティブ・初タイプ)×結果(2;ポジティブ・初タイプ)×動機の提示位置(2;最初・最後)の 4 要因計画。年齢のみ被験者間要因、その他は全て被験者内要因。

【被験者】 3・4・5・6 歳児、各 34 名、計 136 名。

【手続き】 行為者の動機、行為者の行った行動、行動の結果（受動者の情動）からなる物語を提示する。動機の提示位置が最初の場合は動機→行動→結果の順に、最後の場合は行動→結果→動機の順に提示する。動機が最後に提示される方が、新近性効果により認知的負荷が軽減されると考えられる。被験者一人につき、動機のタイプ・結果のタイプ・動機の提示位置の異なる 8 つの物語が提示され、各物語の提示後に、物語の再認、行為者の特

性のラベリング（反社会的特性がすごくあてはまる～向社会的特性がすごくあてはまるの 5 段階評定）と、他の 2 場面における行為者の行動予測（向社会的行動を行う or 反社会的行動を行う）をするように求められる。特性ラベリング課題には因果性の理解が、行動予測課題には因果性と安定性の理解が要求される。

結果と考察

物語の再認 再認率は、年齢による違いは見られなかったが、動機の提示位置による違いは見られなかった。**特性ラベリング課題(FIGURE 1)** 3 歳から動機情報を用いることができるが、結果情報に引きずられずに動機情報を用いることができるのは、5・6 歳児（動機が最後に提示される時）のみであった。**行動予測課題(FIGURE 2)** 3・4・5 歳児はかなり向社会的行動へと回答が偏っており、場面に依存した予測を行っていることが示唆された。その中でも 5 歳児は動機情報を用いることはできたが、結果情報に引きずられずに動機情報を用いることができるのは 6 歳児（動機が最後に提示される時）のみであった。したがって、因果性については 3 歳から気付いているが真の理解がなされるのは 5 歳からであり、安定性については 5 歳から気付いているが真の理解がなされるのは 6 歳からであるということが示唆された。

結論

特性概念の基本的理解が獲得され、特性推論が可能になるのは 6 歳からであることが示唆された。しかし、6 歳においても認知的負荷の軽減を必要としており、未だ発達過程にあると考えられる。

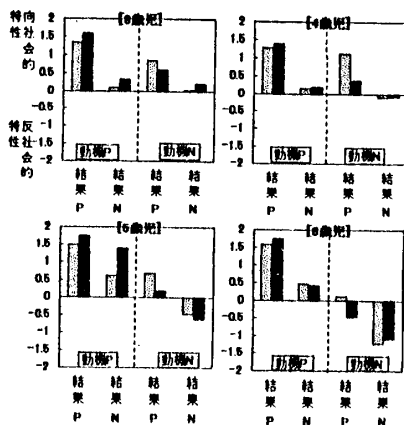


FIGURE 1 特性ラベリング課題

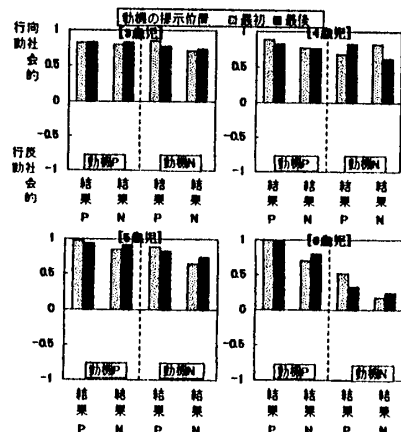


FIGURE 2 行動予測課題